

序章 研究の目的と方法

〈内 容〉

第1節 研究の目的

第2節 研究の方法

第3節 論文の構成

## 第1節 研究の目的

本研究の目的は、小・中学校における読書能力や興味等の発達過程をふまえた読書生活指導カリキュラムの構想にある。研究にあたっては、読書生活指導理論の有効性を検証し、学校教育現場における汎用性・再現性を重視する立場を取る。

### 1. 「読書生活指導」とは

戦後のわが国における読書指導史において、1960年代前半まで「よい本の紹介・感想文の指導」に終始してきた「読書指導」が、「読書生活指導」に向け舵をきる契機となったのが、大村はま国語教室における「読書生活指導」実践である。大村はまは、自らの国語教室で学習者の生活と読書を結び、「新しい読書指導」(大村 1976)の展開を提案実践した。その実践営為の基盤にある「読書生活指導」理論は、本を読むことで自己の課題を発見し、課題解決に向けて「探究的な読書」<sup>\*1</sup>を続ける読書人の育成を目指すものであり、学習者中心の言語生活指導実践理論であった。

「読書指導」と「読書生活指導」は、どこが異なるのか。一つは、指導の「場」の違いである。「読書指導」の「場」はカリキュラムの世界に位置し、児童生徒個人の生活とは異なる領域にある。一方、「読書生活指導」の「場」は学習者個人の生活世界とカリキュラムの世界の混合点である「第三領域」<sup>\*2</sup>(図 P-1, クルトー 2007 参照)に位置すると考えられる。

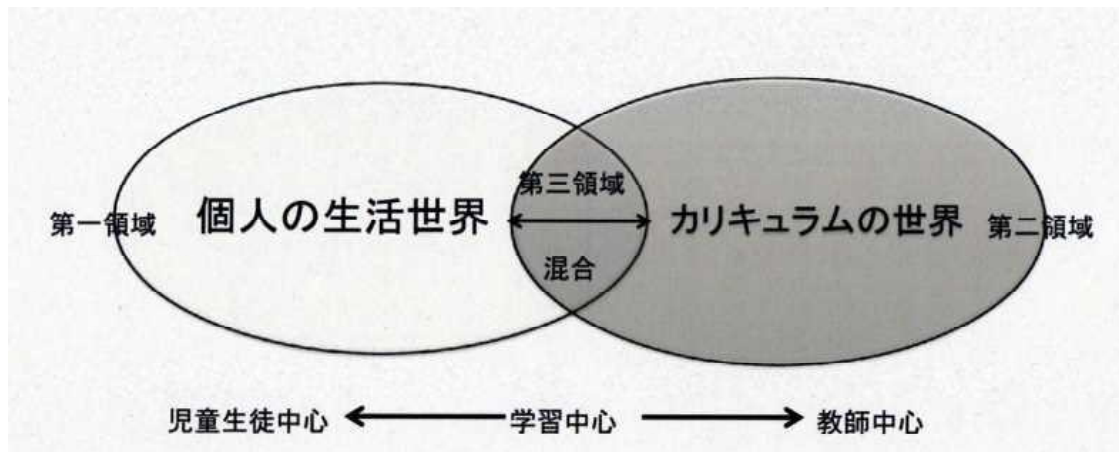


図 P-1 探究的な学習の領域 (クルトーら2007による)

\*1 大村はまの提案する「新しい読書指導」の主旨を、谷木(2017)では 1)様々なジャンルの本を読みこなす技術の習得 2)探究的な読書生活の関心・態度の確立 の2点に整理した。

\*2 Carol. C. Kuhlthau, 他(2007), *Guided Inquiry*, Libraries Unlimited p.32では、生徒の学校外の世界を第一領域とし、学校の教育課程を第二の領域とするならば、第一領域と第二領域を重ね合わせた第三領域は、最も意義のある継続的な学習の場であるとしている。*Guided Inquiry*では、生徒が自らの経験を思い描きつつ、自身で疑問を持ち、探究の過程に自ら進んで取り組む積極的で主体的な学びと、専門的な知識を身につけることを手助けすることによって第三領域を生み出す。

二つには「指導」と「学び」の違いである。「読書指導」は「読書生活指導」をふくむ包括的な概念としても使用されることがある。教科・領域を越えた指導である「読書指導」の目的は文字どおり、学習者を読書の意義に目覚めさせ、読書の習慣をもたせる「指導」である。それに対して、「読書生活指導」は読書による自己の課題発見・解決を目的とした主体的な「学び」である。

## 2. 「読書生活指導」はなぜ要請されるか

「読書生活指導」は、今日なぜ要請されるか。それは、「読書生活指導」理論が、高度情報化社会を見通した「読書生活指導実践」に応じる理論であるからである。にもかかわらず、現状においては「読書生活指導」理論の学校実践現場への定着は充分とはいえない<sup>\*3</sup>。本研究においては、「読書生活指導」理論の定着を阻む要因を次のように考える。

- 1) 「個に応じた継続的指導」把握の困難性
- 2) 原理・計画をもたない指導の実際
- 3) 教科書任せのカリキュラム開発

### 1) 「個に応じた継続的指導」把握の困難性

「教育の制度面、学習指導における教材面、方法面は指導者にとって把握しやすいが、学習者個人の内面に分け入り、自らの指導の体験そのものを学習者の将来に働く関連と構造においてとらえることは至難のこと」（野地 2013）である。

国語教育においても先人の残した遺産の、とらえやすい教材・方法面からの摂取は広く行われてきたが、「国語教育実践の内実そのもの」、「個に応じた継続的な指導の内実そのもの」は容易にとらえることができない。それは、「国語教育実践の一回限りの特性」がその要因である。一回限りの言語行為の実相をとらえようとすれば、指導者および学習者の内面の「記録」による研究しかない。

### 2) 原理・計画をもたない指導の実際

読書指導の原理・計画は一般化していない。本も子どもも無数に存在する。その無数の存在同士の組み合わせを考えると、とりあえずの偶然性に期待し、手近にあるもので指導するしかない現状がある。ことに新時代の情報活用の基盤であるインターネットはさらに膨大で多様な情報の世界であり、紙媒体である本による指導と、インターネットや電子

---

\*3 2012(平成 24)年度文部科学省「学校図書館の現状に関する調査」の結果を見ると、小学校 19,957 校のうち 96.4 %の学校が、中学校では 8,572 校のうち 88.2 %が実施し全校一斉読書を実施している他、中学校で7割近くの学校（小 97.9 %、中 72.1 %）が図書を読み聞かせ（小 96.3 %、中 37.0 %）や必読書・推薦図書コーナーの設置（小 71.6 %、中 76.1 %）などに取り組んでいる。しかし、ブックトーク（いずれの校種も3割以下）は実施率が極端に低くなっており、学校現場における読書指導が、図書の紹介や読書への誘いといったレベルにとどまっていることを物語っている。

媒体による指導の差違やどちらが小・中学生の読書指導に有効であるのかという検討は充分ではない。このことはしかし、学習者の実態を数値化した統計的・量的研究に待つまでもない。「ものの見方・考え方」を手に入れようとするならば、インターネットではなく、著者が主題に基づき構成した「本」を読み、思考・判断することが必要となるからである。部分と全体によってつくられたものを統一してみる力は「本を読む」ことによって育つ。インターネットを活用した「調べ学習」では、事実を捕まえ探していくことが主たる目的である。事実探究ではない、事実を消費するのでもない「深い思考＝探究」は、「本を読む」ことによって、その基礎的な力を身につけることができる。

かつては「本」自体がそうであったように「新しいメディアの出現」は、大人たちの予想を超えて何よりまず若い世代に浸透し、それまでの指導のありかたが覆されるかもしれないという危機感を大人の中に生み出す。しかし、1960年代の「映像メディア」の出現に際しても、「情報リテラシーを育む」といった観点からすでにわれわれは、その指導の原理と筋道、計画を獲得した。重要なのは「探究」という語に代表されるような原理・計画の「再認識」と現状への柔軟な「汎用」である。

### 3)教科書任せのカリキュラム開発

小学校六年間、中学校三年間といった長い期間の子どもの発達を見据え、社会生活においても通用する読解・読書力の育成を見通した読書指導のカリキュラム開発は児童・生徒の読書生活の実態把握から始まる。しかし、現状における読書指導カリキュラムは、一般的な小・中学生像をもとに作成された教科書のカリキュラムに委ねられている。読書指導がしっかりと子どもの生活に落ちていかない原因がここにある。求められるのは個の実態からは遠い一般的なカリキュラムではなく、いかなる個の実態にも即した普遍的なカリキュラムである。

さまざまなメディアが次々に開拓される今日、指導者のみならず学習者が自身の読書生活の実態を把握し、多様なメディアの特性を踏まえつつ将来に向けて自らの読書生活をマネジメントできるよう、段階的・系統的な学びの構築を実現するカリキュラム開発が要請される。読書生活指導理論を、個に応じて具体化する力が指導者に求められるのである。

本研究は、以上 1)2)3)のような「読書生活指導」の定着を阻む要因をふまえつつ、広く学校現場に汎用性のある「読書生活指導」カリキュラムを構想するものである。

## 第2節 研究の方法

第1節で述べた「読書生活指導」の理論の定着を阻む要因を克服し、広く学校現場に汎用性のある「読書生活指導」カリキュラムを構想するため、次の4点から研究を進める。

- (1)「読書生活指導」の普遍的な原理と方法を取り出す
- (2)「読書生活指導」実践の「記録」を分析する
- (3)「読書生活指導」の全体構造を可視化する
- (4)「読書生活指導」理論汎用化に向けての困難点を克服する

### (1)「読書生活指導」の普遍的な原理と方法を取り出す

今日の学校現場においてはいわゆる「調べ学習」に代表される「情報読書」と、「朝の全校一斉読書」に代表される児童生徒の個人の興味・関心に基づく「楽しみ読み」が別個のものとしてとらえられ、実施されている現状がある。「調べ学習」は各教科や総合的な学習の時間に教科担任が、「朝読」や「家庭での読書」は学級担任がというように二分化されることで、指導者を分け、指導領域や指導過程を単純化し、実施しやすいものとする側面があった。「読書生活指導」のカリキュラム構想にあたっては、国語科における「読むこと」の学習指導や読解・読書指導、読書教育・学校図書館教育・情報教育といった教科・領域を越えて、読書教育の普遍的な原理と方法を取り出す。

### (2)「読書生活指導」実践の「記録」を分析する

おおむらはま「読書生活指導」実践の記録である研究資料および「国語学習記録」「読書生活の記録」「国語教室通信」「読書生活通信」の分析をすすめる。一回限りの言語行為の連続でもある学習者の「読書生活」を分析・研究するには、「記録」の特性に適合した質的研究方法の見極めが重要であり、適切な質的研究方法を用いて分析する。

### (3)「読書生活指導」の全体構造を可視化する

「読書生活指導」の普遍的な原理・計画をとらえやすいものとする全体構造を明らかにすることは重要である。学習者が今、発達過程のどの位置にいるのかを見るためにも、全体構造は必要である。現状の「よい本をたくさん読むことをすすめる」「多読」と「感想文」や感想を記しておく「読書ノート」による指導では、学習者の読書生活の実態と指導上の課題は充分には見えてこない。

「読書生活指導」理論の全体構造の把握が難しいのはなぜか。その一つは、指導要素が多いこと、指導要素が互いに関連し合うことで指導の効果が生まれることによるものである。したがって、一般的にとらえにくいとされる全体構造を可視化し、その普遍的な原理・計画をとらえやすいものとする必要がある。

### (4)「読書生活指導」理論汎用化に向けての困難点を克服する

「読書生活指導」実践の指導の系統や構造の研究と相まって、「読書生活指導カリキュラムの構想」に向けては、普遍的体系化が必要になってくる。具体的には次の3点が肝要である。

#### ①用語の普遍化

「読書と生活を結ぶ」というような平易な表現を用いての説明や、大村はまの命名による「読書生活通信」「読書生活の記録」といった語が、大村自身を離れて用いられるとき、大村はま以外の者にとっては再現性・汎用性において困難を伴う理論であるととらえられがちである。したがって大村独自の用語を、汎用性のある語におきかえて説明する必要があると考える。

#### ②情報リテラシー育成の系統・構造化

わが国の読書指導史において 1960 年代後半から実践された「読書生活指導」理論は、

高度情報化社会を生きる力としての「情報リテラシー」の育成を見据えたものであったことを確認し、その指導理論による「情報リテラシー」育成指導の系統・構造化によって実践・汎用への道を開く。

### ③チームによる協働的な指導の体系化

「読書生活指導」理論は教科・領域をまたいで実践されることで指導効果が上がる。また、「読書生活指導」実践においてはこれまで、教職員、保護者、地域の人々等の役割分担・協働によって、子どもの読書を手助けすることの必要性が、必ずしも明示されてこなかった。読書指導・読書教育には協働体制が必要である。

## 第3節 論文の構成

本研究論文の構成を次に示す。

〔論文の構成〕

序章 研究の目的と方法
第1節 研究の目的
第2節 研究の方法
第3節 論文の構成
第1章 読書指導の動向と課題
第1節 学校を取り巻く読書指導の現状
第1項 今なぜ「読書生活指導」は要請されるか
第2項 「読書活動」における「探究 “Inquiry”」への着目
第2節 学校を取り巻く読書指導の動向と課題
第3節 読書指導から読書生活指導へ
第1項 「読書生活指導」の理論的背景
第2項 「読書生活指導」の史的展開
第2章 大村はま「読書生活指導」の実際―「読書生活の記録」に着目して―
第1節 大村国語教室における「読書生活の記録」の意義
第2節 1967～1968年度の「読書生活の記録」に着目して
第1項 「読書生活の記録」誕生までの道筋
第2項 1967年度2年生「読書生活の記録」の概要
第3項 M-GTAによる「まえがき」「あとがき」の分析
第4項 大村はま「読書生活の記録」実践の効果
第3節 「読書生活の記録」による指導の発展と展開
第1項 国語学習記録・「国語教室通信」との関連性
第2項 学習者とともに改良されていくシステムノートの形
第3項 探究的な読書の記録(その1)―問題の深化―
第4項 探究的な読書の記録(その2)―読む生活を書くことがもたらす効果―

第3章 大村はま「読書生活指導」の実践的提案

—昭和50年版西尾実監修『改訂標準中学国語一～三』（教育出版）に着目して—

第1節 中学校三年間を見通した読書生活指導の構造

第1項 昭和50年版『改訂標準中学国語一～三』への着目

第2項 「新しい読書指導」を生み出す工夫 —「探究的な読書」への着目

第3項 読書生活指導の「構造化」を支える要素

第2節 中学校三年間を見通した読書生活指導の意義と実際(その1)

第1項 読書生活指導における『読書生活通信』の役割

第2項 読書生活指導における教師による選書の意義と実際

第3節 中学校三年間を見通した読書生活指導の意義と実際(その2)

第1項 読書生活指導における「学習の手びき」の役割

第2項 現代版中学国語教科書との比較

第4節 大村はま読書生活指導の特質と課題

第1項 大村はま読書生活指導の特質

第2項 大村はま読書生活指導の課題

第4章 「これからの読書生活指導」への実践的提案

第1節 「探究的な読書生活」の指導の必要性

第1項 学習指導要領の改訂から見えてくるもの

第2項 学習者の「読書興味・読書能力」の発達をどうとらえるか

第2節 小・中学校における「読書生活指導のカリキュラム」の構想

第1項 「これからの読書生活指導」の理論的共通理解

第2項 「これからの読書生活指導」の計画および実践の体系

第3項 学習者の実態に即した「読書生活指導システム」の構築

第3項 主体的かつ対話的・協同的な学習集団の形成

第1項 「探究共同体」の成立に向けて

第2項 主体的かつ対話的・協同的な学習集団の形成のための理論的背景

第3項 主体的かつ対話的・協同的な学習集団の形成のための実践的提案

終章 研究のまとめ

第1項 研究のまとめ

第2項 今後の課題

[論文各章の概要]

次に本研究論文の各章の概要を次に示す。

**序章(本章)**では、「研究の目的と方法」および「論文の構成」について述べた。

**第1章 読書指導の動向と課題** では、今日なぜ「読書生活指導」は要請されるか、学校を取り巻く読書指導の現状について述べる。とりわけ「読書生活指導」における「読書活動」は「探究(Inquiry)的な読書」としての特質に着目し、知識基盤社会における「読書の役割」について考察する。さらに学校を取り巻く読書指導の動向と課題をふまえ、わが国の読書教育が今「読書生活指導」を必要とする現状についての分析と合わせて、わが国における「読書生活指導理論」生成過程における理論的背景と史的展開をとらえる。

**第2章 大村はま「読書生活指導」の実際―「読書生活の記録」に着目して―** では、大村国語教室における「読書生活の記録」の意義・特質を分析し、大村はま「読書生活指導」の全体構造上のどこに位置づくかについて考察する。

大村はま「読書生活指導」実践の創始期にあたる1967～1968年度石川台中学校2年生8名の「読書生活の記録」の分析に際しては、質的分析方法の一つである「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」の修正版 M-GTA(木下 2007)を用いて考察をすすめる。「読書生活の記録」による継続的な指導は、学習者の意見を取り入れながら次第に発展・展開していく。

また、1969～1978年度においては、個の特性に応じた「読書生活の記録」による指導の個別化が顕著であり、これらの分析と合わせて、「読書生活の記録」による指導の発展と展開を通して、指導の意義を探る。

**第3章 大村はま「読書生活指導」の実践的提案―昭和50年版西尾実監修『改訂標準中学国語一～三』(教育出版)に着目して―** では、大村はま自身が執筆・編集に携わった教科書の中学校三年間を見通した読書生活指導カリキュラムの実際から、教科書における大村はま読書生活指導の全体構造をとらえる。大村はま「読書生活指導」実践の重要な構成要素である「読書生活の記録」「ブックリスト」「読書生活通信」「読書指導(関連)単元」「学習の手びき」等をモジュール化することによって、指導の全体構造をとらえる。

また、現行の中学校国語教科書における読書指導カリキュラムとの比較によって、汎用化に向けての課題を明らかにする。

さらに、米国における情報リテラシー育成指導理論との比較を通して、大村はま読書生活指導の特質および課題をとらえる。

**第4章「これからの読書生活指導」への実践的提案** は、本研究の目的である「小・中学校における発達過程をふまえた読書生活指導の構想」を提示するものである。

第1章から第3章までの分析・考察を踏まえて、学習者の生活と本をつなぐ「読書生活指導」の原理・方法を提示するとともに、大村はま実践の汎用化に向けての課題および今日の教育現場における課題を克服する方法を提案する。



小・中学校における九年間の「読書生活指導カリキュラム構想」は、大村はま読書生活指導の分析・考察および提案をふまえたものとして提示する。

**終章 研究のまとめ** では、研究を振り返り、「小・中学校における発達過程をふまえた読書生活指導の構想」の実践化に向けての提案について述べる。

以上が、本研究の目的と方法および構成を踏まえた研究の概要である。

#### －序章 参考文献－

- 木下康仁(2007)「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)の分析技法」,『富山大学看護学会誌』6(2),pp.1-10
- クルト一他(2007) Carol C. Kuhlthau, Leslie K. Maniotes, Ann K. Caspari, *Guided Inquiry* (初版) Libraries Unlimited
- 野地潤家(2013)「国語教育の創造のために」『国語教育の遺産と創造』,溪水社,pp.161-162
- 大村はま(1976)「読書人の基礎能力を養うために」,『国語教育基本論文集成』18, 明治図書, pp.289-326
- 谷木由利(2017)「大村はま読書生活指導の構造と展開―「教科書」でみる中学校三年間のカリキュラム―」,『国語科教育』81集, 全国大学国語教育学会, pp.50-58